

『露団々』序と『梵雲庵記』

今 井 源 衛

幸田露伴が処女作「露団々」によって一躍文壇に名を得たことはよく知られているが、その序文を依田学海が書いていることはさほど知られてはいないらしい。というのは、この本は明治二十三年十二月二十四日付で金港堂から出版され、この初版にはこの学海の序文が載せられているが、それ以後は絶えてその事はなくなつたからである。

しかし学海がこの序文を書いた事情は、以下に述べるように、無窮会本「学海日録」（以下「日録」と略称）および韓国本「墨水別墅雜録」（以下「雜録」と略称）によって明らかであり、またその間に学海が推戴を重ねた跡もつぶさに知ることが出来る。

まづ「日録」によれば、明治二十一年十二月十八日条に、

（略）旧友小林樁岳か養家の一子淡島某來訪。友人一人を携來り、一卷の小説を示さる。露団々と名づく。余か序を請はれたり。其人いへらく、僕は書は一種の思想をもて作り出したり。これをよみて、心に適はは序を賜ふへし、適ひ給はずは、退け給ふとも恨なしといひき。淡島又余井原西鶴か好色一代男八巻及び曲亭かいと古き小説一卷をかされき。此夜小説をよみみ

る。けにかの人のいひしに違はず、文章趣向皆意外に出たり。大かた八文字屋本に奪胎して西洋の事を叙したるものなり。此人必ず洋書を多くよみて、その妙を得たるものによ。多く得かたき才子なり。求めずとも必ず序文を作るへし。

文中、淡島某とあるのは淡島寒月である。小林樁岳は当時大通として名が高く、戯画を得意とした画家で、学海の住む向島の別墅に隣りあつた弘福寺に寄寓していたこともあつて、学海とは親交があつた。寒月はその実子であり、時に三十歳、露伴は二十一歳である。露伴や紅葉が寒月の蔵書によつて、西鶴の作品を知つたことは既によく知られているが、学海もまたしかりであつた。そのことは、翌十九日条に、

一代男を讀終りぬ。西鶴の書は余これを始めてよみき。極めて卑猥なる事を俗語にていとおもしろくしるせり。たたそのかきさま分明ならず、その事を滑稽となく実事ともなく、一節毎に趣を異にして、照応なく波瀾もなく一種別様の文章なり。殊に当時妓院売娼の風尽さすといふ事なし。猥褻の事うつつ事少なからねとも、自ら風致ありて、また妙をきはむ。小説家の好み

てよむもまたゆゑなきにあらす。

とあることで明白である。ついでに言えば、寒月は西鶴本の中でも一代男を最高の作品と考へており、彼が手に入れた一代男は「大坂版の初版で、八冊目は八文字屋自笑の入れ本でしたが、この入れ本の八冊目には絵はなかったので、私は四方梅彦氏を見て、その絵を増補しておいた」(昭和八年刊「梵雲庵雑話」八三ページ)という寒月の特別の愛蔵本であった。それはともかくとして、『雑録』の明治二十三年八月六日条にも、

寒月号愛鶴軒、小林椿岳在淡島時所生、後椿岳与淡島絶。寒月奇編、喜禅理、愛井原西鶴著書、多蓄其書、因以為号。時作文字、彷彿西鶴。幸田露伴尾崎紅葉皆得因寒月始読西鶴書、深愛其為人。

とあって、その辺の事情はいつそう明らかである。

しかし興味深いのは、この逸話にもうかがうことのできる露伴の気鋭の青年らしい若々しさや自負心であり、またそれに対する学海の、優れた才能を持った若者に対する豊かな理解力と、老いて衰えを知らない鋭敏な感性であろう。

学海が紅葉や露伴と同じく、寒月によってはじめて西鶴の作品を知った事とともに、露伴の処女作品『露団々』に強い感銘を受け、頼まれずとも進んで序を書こうとさえ言っていることもまた鮮々には見過ごせない。

学海はその翌日向島の別荘に出かけて、二十二日に小川町に戻ったが、さつそく、

露団々の作者、末広町番地の幸田成行来る。きのふ余か作りた

る序文を与ふ。

とある。学海は十八日以来わずか二日間に、一代男と露団々を読み、序文を書いたのである。五十六歳という年齢を考えれば、彼の異常な熱意を汲み取るべきであろう。

この序文は当然向島の別荘で書かれたものとおぼしく、短文ながらその全文が『雑録』の二十日条に記されている。

自小川坊来。過椿岳。先是、椿岳子称淡島氏者、有文才、且通禅理。薦其友人幸田某、示所著小説露団々。奇甚。請余一言、余為作此序。

露団々。非露、是白玉也。又非尋常之珠玉、是連城之璧矣。近時小説盛行、不啻汗牛充棟、求片玉於瓦礫中、不多得也。余嘗得一人焉。曰山田美妙齋、今年廿二、瑩如美玉。吐囁温雅、著作敏妙、其文章所謂言文一致者。又得一人焉、曰相田君。年殆与美妙子相若。今読其所著露団々、警拔奇雋、咳唾成珠。盖以自笑西鶴之伎倆、兼倪涅儒斯之精神、落想来自天外、奇思湧於毫端。若与美妙子連鑣馳驅中原、不知鹿落誰手。抑聞、金茎之玉露、漢武服一滴、以換凡骨。読此書者、吾知、心氣縹緲、有凌雲之想矣。

(露団々。露に非ず、是れ白玉也。又尋常の珠玉に非ず、是れ連城の璧なり。近時小説盛に行はるること、音に汗牛充棟のみにあらず、片玉を瓦礫の中に求めて、多くは得ざる也。余嘗て人を得たり、曰はく山田美妙齋、今年二十二、瑩として美玉の如し。吐囁温雅、著作敏妙、其の文章は所謂言文一致なる者なり。又一人を得たり、曰はく相田君、年殆と美妙子と相若し。

今其の著す所の露団々を読むに、警拔奇備、咳唾珠を成す。蓋し可笑西鶴の伎倆を以て、倪淫儒斯之精神を兼ね、落想天外より来たり、奇思毫端に湧く。若し美妙子とともに、鑪を運ねて中原を馳駆せば、知らず鹿誰が手に落つるかを。抑も聞く、金茎之玉露、漢武一滴を服し、以て凡骨に換ふと。此の書を読む者は、吾知る、心氣縹緲として、凌雲之想有らんことを。）

ところで、右に掲げた本文中には、原本にはかなりの訂正箇所があり、これは推敲訂正された結果の文である。傍線を施した部分の訂正以前の底本文との異同を示せば、

非↑非是。 瑩如美玉↑婢約美少年 咳唾成珠↑華々皆新
兼↑写出 手↑也 換凡骨↑羽化登僊 心氣↑神氣
矣↑也

この初案から再案への推敲訂正の意味について細かに論ずることは、今差し控えておきたいが、それ以外に特に目をひくのは「幸田」を「相田」と誤っていることである。右のような全文に渉る訂正の間にも、この誤りはそのままに残されている。十八日に寒月から口頭で露伴の名を聞いて、姓は「相田」と学海は思い込んでしまったのであるうか、十八日の条に露伴のことを「友人」とのみ記しているのも、寒月の紹介の仕方が不明瞭だった為ではなからうか。

しかし翌々二十日に向島で記した「雑録」には「幸田某」とあり、小川町に戻った二十二日の「日録」には、前記の通り正確に「幸田成行」と記しており、おそらくはこの誤りには直ちに気付いたのであろう。ともかくも、ささやかながらこんな混乱が起きたというのも、いかにも無名の青年の登場にふさわしく、露伴が当代第

「露団々」序と「梵雲庵記」

一人者たる学海に認められた事情にまつわるエピソードとして興味深い。

ところで、「露団々」が本として出版されたのは前述のとおり、それよりまる二年後の明治三十三年十二月である。その際に学海はこの序文に重ねて修正を加えた。

即ち、前記序文の「不多得也」に続いて

若老成諸公。今不具論。其於少年才子。余嘗得一人焉。曰山田美妙齋。今年二十二。瑩如美玉。其文章所謂言文一致者。吐囁温雅。意致靈活。又得一人焉。……

と変わっている。又そのほか、前に「相田君」とあったのが、「露伴君」とあるのは当然だが、「可笑西鶴」が「西鶴自笑」としかるべき順序に正されるなどしている。その日付には「明治戊子某月」とあり、明治二十一年のこと、前記のように、その年十二月二十日に「雑録」に序文を書いた後、同二十二日露伴本人にそれを手渡すまでの間に、学海は重ねて筆を加えたのであろうか。あるいはまた、二十二年になされたであろう校正の際に、日付はもとのままに、文字のみ手を加えたということであろうか。どちらにせよ、二十一歳の未知の青年露伴に寄せた学海の好意の並々でないことを物語るものと言える。

学海と寒月との交友関係は、樺岳が翌二十二年九月二十一日に死去して間もなく、寒月が学海の向島の別荘の隣にあった弘福寺（ここには樺岳が生前長く住んでいた）に移ってくる、一段と親しみを加えていったようであり、「雑録」には明治二十三年よりその巻末三十二年末にいたる間に、寒月の名は二十五回もみえ、いて、晩

年の学海にとつては、杉浦梅潭・宮崎三味・村上浪六・関根痴堂・杉山三郊・信夫恕軒・川田龜江などとともに最も親しい友人の一人であった。

二人の交友の具体的な内容については、それ以上触れないことにしたが、ここには寒月が住んだ「梵雲庵」について学海が作った「梵雲庵記」があることだけを述べておく。

この「梵雲庵」というのは、前記「梵雲庵雑話」の中に、前条にいひ忘れましたが、森下町の家から此の向島に移つて、もう八九年もたちます。此の家は私の父が数寄に建てた隠居所なのです。私は寓居を梵雲庵と号してゐます。依田学海さんが、漢文でその其の記を書いて下さいました。これです、御覧なさい。

とあり、次に後に紹介する一文を掲げている。この寒月の文の初出掲載誌は、その末尾の注記に、(明治三十年八月「趣味」第一巻第三号)とある。これによつても、梵雲庵の由来や寒月がここに移つた時期もほぼ前記のとおりと推察される。もつとも、前に引いた翌二十三年八月六日の「雑録」の記事の本文に、「近ごろ日就社新聞に寒月の死去を弔う記事が出たが、事実か否か知らない」との趣旨の文字があり、またその後文にも、

寒月は家甚だ富む、然れども四壁蕭然、机上塵積ること数寸、破窓紙糊、煤痕墨の如くなるも、以て意と為さざるも亦奇人也。

とあり、いかにも奇人と呼ぶにふさわしい寒月の風貌とともに、彼が当時なお弘福寺には移つていなかったこともまた明らかである。

しかし、そこへ移つたのは、寒月自ら三十年八月より八九年以前と云うのだから、遅くとも二十三年々末には、向島に移つたものと思われる。

ところで、「雑録」の明治二十九年十二月二十日条には、寒月が言つた学海の手に成る「梵雲庵の記」の全文が遺されている。「日録」にはこの月「二十八日墨水にゆき三十日かへる」とあつて、その前後に寒月にかかわる記事はない。この文は向島の別荘で書かれたことあきらかだ。今その全文を引く。

梵雲庵記

太陽照赫、水氣蒸騰、化為雲。水溪山嶽映帶林木、或融解為露為雨。或凝結而為霰為雪、或激盪為雷霆。不知然而然、蓋以其無心也。陶靖節云、雲無心而出岫。夫天下之事莫善惡心焉。孝子之於親、忠臣之於君、処艱危困厄之際、分裂身軀、粉齏肝腦、不敢少惜者何也。無心於富貴利達、知有君親、而不知有其身、猶雲之不知融為雨露、結為霰雪、激為雷霆也。山林隱逸士、樂天安命、不知得失利害為何物、逍遙天地、吸呼日月。其躬得無類此乎。彼其遭遇雖不同、孝子忠臣処艱危困厄之際、而於人生之榮枯盛衰、籌之熟矣。一以無心處之、莫不迎刃而解也。吾友寒月居士、身生素封、心在白雲、去闕闕之繁華、就郊野之閑寂。頃者名其牛島寓居曰梵雲庵。隣弘福禪寺。雖茅舍屋廬三椽、客至瀹茶談禪、泊然相對、如遺世事者。余問以其名梵雲。居士喑然曰、僕愛雲之無心。聚散為雨露、潤沢山川、為霜雪、枯落草木、為雷霆、震動洪地耳。其云梵者僕好仏理、不求其形。似聊借以寓意、非有心為之也。然則居士之無心。人間

榮枯得失久矣。宜其以雲為名也。乃為作記。

(太陽照り赫き、水氣蒸騰して、化して雲と為る。水溪山嶽林木を映帶し、或は融解して露と為り雨と為る。或は凝結して霰と為り雪と為り、或は激盪して雷霆と為る。然るを知らずして然るは、蓋し其の無心を以て也。陶靖節云はく、雲無心にして岫を出づと。夫れ天下の事善惡の心無し。孝子の親に於ける、忠臣の君に於ける、艱危困厄の際に処して、身軀を分裂し、肝腦を粉齏して、敢て少しも惜まざる者は何ぞや。富貴利達に無心にして、君親有るを知りて、其の身有るを知らざることを、猶ほ雲の融けて雨露と為り、結びて霰雪と為り、激して雷霆と為るを知らざるがごとき也。山林隱逸の士、天を楽しみ命に安んじて、得失利害の何物たるかを知らず、天地に逍遙し、日月に吸呼す。其の躬ら得たるものに此に類すること無からんか。彼其の遭遇するは同じからずと雖も、孝子忠臣の艱危困厄の際に処し、其の人生の榮枯盛衰に於て、之を籌ること熟せり。一に無心を以て之に応じ、刃を迎へて解せざる莫き也。吾が友寒月居士、身は素封に生れて、心は白雲に在り。闔閭の繁華を去つて、郊野の閑寂に就く。頃者其の牛島の寓居に名づけて梵雲庵と曰ふ。弘福禪寺に隣し、茅舎屋廬かに三櫺と雖も、客至れば茶を瀹し禪を談じ、泊然として相對して世事を通る者の如し。余問ふに其の名梵雲を以てす。居士嗚然として曰く、僕雲の無心を愛す。聚散して 雨露と為り、山川を潤沢し、霜雪と為りて草木を枯落し、雷霆と為りて洪水を震動するのみ。其の梵と云ふは、僕仏理を好みて、其の形を求めず。聊か借るに寓意を以てする

「露団々」序と「梵雲庵記」

に似たれども、心有るに非ずして之を為す也と。然らば則ち居士はこれ無心也。人間榮枯得失久しいかな。宜しく其れ雲を以て名と為すべき也。乃ち為に記を作る。

ところで、先に述べた「梵雲庵雜話」に引かれた「梵雲庵記」は右の全文ではなく、「吾友寒月」以下末尾までである。その文末に、

明治三十年八月

学海居士依田百川書

於墨水柳蔭精廬

とあり、日付の上では、「雜錄」の記事よりも八か月おかれており、また文中二箇所それぞれとの異同がある。すなわち、前掲「雜錄」所収「梵雲庵記」中の、傍点を施した「洪水」と「為之」とは、「梵雲庵雜話」ではそれぞれ「天地」・「為云」と変わっている。後者はあるいは寒月が「之」を「云」と誤読、あるいは印刷に当って誤植したものかとも思われるが、前者の「洪水」が「天地」と変わったのは、あきらかに書き換えである。これも先に述べた「露団々」の序文の場合とおなじく、一応原稿を書きあげてから、雜誌「趣味」の発刊までの間に若干手を加えたものであろうか。

しかし、原稿の推敲の跡は、その草稿ともいふべき「雜錄」の本文の中にすでにかなり認められるのである。同じく傍線をほどこした箇所はおおむね次の通りである。

(1) 初案本文に後から補入したもの。……「化為雲水溪山嶽映帶林木」・「或激盪為雷霆」

(2) 同じく修正したもの

不知↑□不知其。蓋以其↑以。少借↑一願
利達↑死生 不知↑ナシ 山林隱逸↑道義之

不同↑与　而↑不仮其而　華↑冗

郊野↑幽門田野（「田野」二字再案「茅柴」）。

愛↑以　山川↑草木　宜↑其　乃↑宜乃

これらの推敲の意図や効果については、また別の機会を俟って述べたい。

(注)

一 「露団々」初版の学海の序文については中野三敏氏から教えられるところが大きであった。記して謝意を表する。

二 本稿の校正段階に、井上弘氏より、同氏の「依田学海の研究

——「墨水別墅雜録」を通してみた文学活動について——」

（静岡女子大学創立二十周年記念論文集、昭和六十三年三月発行）を贈られ、氏が拙編校訂になる「墨水別墅雜録」その他に

よって既に学海作の「露団々」の序文の事についても触れてお

られることを知った。しかし、他に氏の触れておられない事も

あるので、本稿ではあえて、そのまま原稿に修正を加えなかつ

た。